

## 題名

MOIS MUN Circle を立ち上げてみた！—なぜ MOIS に MUN が必要なのか—  
by MOIS MUN Circle 代表 綾部真宙、木ノ内遥也、鈴木輝真

## 目次

### 第一章 MOIS MUN Circle 代表より

1. 綾部真宙
2. 木ノ内遥也
3. 鈴木輝真

### 第二章 模擬国連(Model United Nation)とは

1. MUN の M は「Model」の M！
2. 国際連合 (United Nation) との違いは？
3. なぜ今多くの学校で MUN が人気なのか
4. まとめ、MUN とは

### 第三章 MOIS と MUN の親和性

1. MOIS の教育理念
2. MUN の目指す姿、MOIS の目指す姿
3. 「国際社会」の英語—Not 外国語学校, But 国際学校—

### 第四章 英語を用いた高等教育の学び

1. 日本の高校における英語の課題
2. 「伝わる」英語

### 第五章 参加者同士の好影響

1. アクティブ・ラーニング
2. ただ乗りを許さない MUN
3. ロールプレイ型ワークショップ

### 第六章 これからの MOIS、これからの MUN

1. 今後の目標
2. 目標達成までの課題、MOIS と MUN の理念を追求するために

### 第七章 まとめ

1. MOIS MUN Circle に参加しませんか？
2. 代表の意気込み

## 第一章 自己紹介

### 1. 綾部真宙

大宮国際中等教育学校 6 年の綾部真宙です。

私は、5 年次に英語探究の授業でプロジェクトを行うにあたり、自分のスピーキングスキルを特に向上させたいと思い、模擬国連に挑戦してみようと決めました。模擬国連は、フォーマルな英語とカジュアルな英語を両方使う場面があり、それぞれのスキルを成長させることができる点が大きな魅力です。外部の模擬国連に参加した際には、周りの英語力の高さに圧倒されましたが、そこに飛び込んでみることで、自分自身大きく成長できたと思っています。また、「世界を日本以外の国の視点から見る」という経験は、模擬国連ならではの面白さだと思います。模擬国連で気付いたこと、学んだことは、これからの社会をよりよくしていくためのヒントになり、自分自身の今後の生活にもつながってくるのではないかと思います。そういった点からも、模擬国連の魅力をより多くの人に発信するべく、鈴木君や木ノ内君とサークルを設立する運びとなりました。ぜひ、このブログを通して模擬国連について少しでも関心を持っていただければ嬉しいです。

### 2. 木ノ内遥也

こんにちは、木ノ内遥也です。

私は、今年の 1 月に「JEIMUN」という模擬国連に参加したのがきっかけでこのサークル立ち上げメンバーになることとなりました。その模擬国連はとても過酷で、周りの英語力に圧倒されながら、なんとか必死に食らいつくという 3 日間でした。そして、このレベルにたどり着くには中学生、または高校の早い段階からこの模擬国連の複雑なシステムに慣れ、たくさん場数を踏んでいく必要があると感じました。実は、このサークルのメンバーから私が参加した「JEIMUN」で最優秀賞をとる人材を育て上げるのが私の目標でもあります。帰国子女が多く集まる集団で、リーダーシップを発揮することは、決して容易ではありません。しかし、ここに集まる仲間とともに切磋琢磨することで、それは達成可能だと信じています。そして、何より私が思う模擬国連の醍醐味である模擬国連でつながる人との出会いを楽しんで、自分のスキルを磨いてほしいと思います。そして、このブログをご覧の皆さんにも「模擬国連を経験してほしい」と少しでも思ったらぜひ参加してみてください。ぜひ模擬国連を通して成長した自分の姿を思い浮かべて、1 歩踏み出してください。

### 3. 鈴木輝真

こんにちは。大宮国際中等教育学校 6 年の鈴木輝真です。

私が模擬国連に参加したのは、5 年生の夏の頃でした。英語探究という授業（現在の LAP）

で、何か英語に関するプロジェクトをやろうと思ったときに、Mr. Semans からさいたま市模擬国連の話聞き、そこで綾部君と一緒にやってみようと思いついたのがきっかけです。同じ一期生の中には、すでに何度か模擬国連をやっている人がいたのですが、私は 5 年生になって初めて体験したイベントだったので、なにかから練習をすればいいのか、何を調べればいいのかもわからず、手取り足取り調べながら本番に向けて準備を進めていました。この経験が、後に MOIS MUN Circle を立ち上げる一つの要因にもなっています。つまり、私が初めて模擬国連に参加したときのように、何から手を付ければよいかかわからない人たちのサポートをすることができる組織があればよいなという思いから、このサークルを立ち上げました。

また、私がさいたま市模擬国連に参加した時、このイベントをもっと MOIS 生に知ってほしいと思ったことも、立ち上げの理由の一つです。なぜなら、MOIS が目指す学習者像と MUN を通して得られる経験の親和性がとても高いと思ったからです（この説明は、第三章で詳しく説明しています）

このブログを読んでもくださる皆さんには、ぜひ一度模擬国連について知っていただければと思います。このブログでももちろんご説明いたしますが、実際に参加するのはいかがでしょうか。

「模擬国連って英語が喋れる人じゃないと参加できないんでしょ」

こう思っている方も中にはいらっしゃるかもしれませんが、このブログをお読みいただければ「私も模擬国連に参加できるかも」となるはずです。ぜひ、最後までお読みください！

## 第二章 模擬国連(Model United Nation)とは

### 1. MUN の M は「Model」の M!

そもそも、模擬国連とは何でしょうか。模擬国連は、英語で「Model United Nation（通称 MUN）」と呼ばれています。

国際連合は、第二次世界大戦後の 1945 年に発足された、「平和維持と社会発展を目的とした国際機関」であることは皆さんご存知かと思いますが、ここで一つ疑問が出てきます。それは「模擬 (Model)」とは何かということです。

模擬国連は、遡ること 100 年前、アメリカのハーバード大学で開催された「模擬国際連盟 (Model League of Nations)」を起源としています。国際連盟は、第一次世界大戦終了後に組織された組織ですが、国際政治の仕組みや、国際問題の解決までを実際に体験することができる教育プログラムとして、高校・大学でも国連に似たものを実施しようということで始まったのが模擬国連です。

そして、この模擬国連では、国連会議の中でも特に重要な、参加者が各国の代表・大使になり切って、他国と定められたトピックについて話し合う過程を切り出したイベントです。そのため、「模擬」国連は、「国連の重要な話し合いの部分抜き出しているんだ」と覚えてください。

### 2. 実際の国連 (United Nation) との違いは？

前文で述べた通り、模擬国連は「国連の一部を抜き出した」イベントですので、実際の国連と異なる部分も多くあります。

まず、模擬国連で参加者が担当する国は、毎回ランダムです。国際連合 (United Nations) では、各国の決められた大使が会議に出席しますが、模擬国連では毎回の会議で異なる国を担当することが茶飯事です。つまり、模擬国連参加者は、様々な国の視点から国際問題に取り組むことができるという利点があります。これは実際の国際連合でやろうとすることもできません。

また、実際に参加してみるとわかりますが、模擬国連の面白いところは DR にあります。模擬国連では、各国の大使が協力し、最終的に一つの Draft Resolution という文書を作成します。実際の国際連合でもこの文書は作成しますが、模擬国連の良いところは、いい意味で「DRに影響がないこと」です。つまり、模擬国連内で決まった約束事が実社会に適用されることはないのです。自由な発想で解決策を探ることができます。実際の国際連合にはない切り口から、国際問題の解決策を考えることができるのも、模擬国連が国連と異なるところです。

### 3. なぜ今多くの学校で MUN が人気なのか？

JMUN によると、現在、世界ではおよそ 400 の模擬国連会議が高校や大学で開催されているそうです。しかし、実際その数は日々拡大しているので、もっと多くの模擬国連が開催されているでしょう。今日では、なぜこのように世界中で模擬国連が行われているのでしょうか。理由は様々ですが、以下のようなものが主に挙げられるでしょう。

#### (1) 英語力の向上

日本で開催されている模擬国連の中には、もちろん日本語のみで開催されるものもありますが、実際には英語と併用だったり、英語のみで開催されたりする 경우가圧倒的に多いです。そのため、模擬国連に参加する生徒の多くは英語力（特にスピーキング能力）向上や、英語を使う機会を増やすことを目的として模擬国連に参加しています。私の周りの高校生や、勿論私自身も英語力向上を参加の目的の一つとしていました。

また、模擬国連では「Formal Speech（公式討議）」と「Unmoderated Caucus(非着席討議)」というものがありますが、この二つの中で使用する英語が異なることも特徴でしょう。Formal Speech は、文字通り「フォーマル（正式）」なので、丁寧な英語を用いて離さなければなりません。私自身、普段はあまりフォーマルな英語を勉強しないので、模擬国連に参加して初めて知った単語や話し方もありました。

一方、Unmoderated Caucus は、他国の大使と自由に話し合いができる時間であり、カジュアルな英語を用いても問題ありません。状況に応じて英語を使い分けることは、普通の学校の授業で習うことが少ないですが、模擬国連では、このようにただ英語を話すのではなく、場面や相手に合ったコミュニケーションを身に着けることができます。日本語でも、大勢の前で使う言葉と友達と二人でいるときの言葉は異なりますよね。英語の場合も同じなのです。

#### (2) 他校との交流

模擬国連には、大きく分けて二つの種類があります。一つは在学している高校・大学の中のみで行われるドメスティックな模擬国連。規模が小さいので高頻度で開催することができ、その分様々な国際問題を多くの国の視点から知る機会が増えます。国連の仕組みや話し合いの進め方に慣れたり、英語力を高めたりする上ではかなり効果的でしょう。

また一方で、他の学校と連携して開催したり全国規模で行われたりする、よりオープンな模擬国連もあります。この場合の利点として、ある程度の緊張感を保ってより本格的に模擬国連に携わることができることが挙げられます。今まで練習してき

たことがどの程度通用するのか、また他校の生徒からリーダーシップをもって会議をまとめる方法や新しい英語も学ぶことができるでしょう。

皆さんも、普段の英語の授業は学校で慣れ親しんだ人と一緒に受けるので、リラックスした状態で英語を使うことができますと思います。しかし、知らない人と初めて話す場合はどうでしょうか。いつものようにリラックスした状態で英語を話せるとは限りません。実際、私が初めて模擬国連に参加した時は、自己紹介などの何度も反復する英語はスラスラ話せたのですが、その後に相手から来る質問や話す内容は思ったように話すことができませんでした。

模擬国連は、その場その場で対応する、より実践的な英語能力が求められます。そのため、ドメスティックな方で練習を重ね、オープンな方で他校の生徒ともかかわることで、自身の英語運用能力を知る機会にもなります。

### (3) 教育プログラムとしての質の高さ

模擬国連が人気な理由には、もちろん英語能力の向上や他行との交流もありますが、最も重要なのは模擬国連という教育プログラムの有意性にあります。前述のとおり、模擬国連は国際問題を様々な視点から考えたり、国連の仕組みを知れたりする良い機会になります。また、練習や本番を通じて英語力の向上が期待できる面も魅力的なところですよ。

しかし、これらは模擬国連のメリットの中でもごくごく小さな部分に過ぎません。国際問題の理解や英語というのは、一般教育として重要ですが、模擬国連はもっと、「教育プログラム」という面で大きなメリットがあります。

例えば、模擬国連で養うことができる能力の一つに「リーダーシップ」があります。例えば、模擬国連では最終的に各国が納得する古音のできる政策をまとめた、Draft Resolution という文書を作成します。そして勿論、DR 作成者は各国に大使に、DR に納得できるか、どのような点を変更したいかを聞きだし、大使同士の意見をまとめていかなければなりません。参加者の意見を聞き出し、とりまとめ、新しい考え（政策）を提案する力は、リーダーシップの条件に欠かせません。私が初めて模擬国連に参加した時は、どのように立ち回ればよいのかがわからず、リーダーシップをとることはできませんでした。が、DR を事前に作ったり、相手の国の情報を調べたり、積極的に聞きに行ったりといったリーダーシップをとるための準備を重ねていくことで、誰でも会場でリーダーシップをとることは可能です。

また、協調や傾聴の面でも模擬国連は有効です。リーダーシップとも関連しますが、模擬国連では、大使の国益や政策を聞き出し、それらを統合していくことが求められます。そのため、リーダーシップをとるうえでは必然的に相手の意見を丁寧に聞く（傾聴）と、それぞれの大使から出された意見に納得できるところと納得できないところに対する妥協点を探す姿勢（協調）が養われるのです。これらの能力は模

擬国連だけに限らず、MOIS でたびたびおこなわれるグループワークやプレゼンテーションにも応用できますし、協調や傾聴に至っては日常会話でも必要なスキルです。MOIS では自分の意見を発信することが重要視される傾向にありますが、その意見を聞いてもらうためにはまず相手の話をしっかり聞くことが必要です。お互いに「この人は私の話を真剣に聞いてくれる」という信頼関係が成り立っているからこそお互いに安心して意見を発信することができる環境が形成されるので、模擬国連はそういった意味で優れたプログラムであるといえるでしょう。

#### 4. まとめ、MUN とは

MUN は、ただ英語が得意な人だけでなく、今後の学校教育におけるプログラムとして非常に有用であることは確かです。大宮国際では、開校して間もなく模擬国連に参加する人が多い印象を受けましたが、このように自発的に参加してくれる方だけでなく、模擬国連のメリットについてより多くの方に気づいてくれる機会を提供することも必要でしょう。私は、その機会を提供するため、開校6年目になって正式に模擬国連のサークルを立ち上げました。英語を通してのコミュニケーションや、学校を超えた交流、リーダーシップやグループワークに興味があれば、参加して損はありません。次章からは、MOIS と MUN についてより深掘りしていきますが、やはり MUN が生徒にとって有用な教育プログラムであるという主張は変わりません。ぜひ、ご拝読ください。

## 第三章 MOIS と MUN の親和性

### 1. MOIS の教育理念

本章では、MOIS でなぜ模擬国連が必要なのかを、双方の目的・理念を紹介するとともに述べていきます。

まずは、MOIS の理念を見ていきましょう。以下は、大宮国際中等教育学校のパンフレットから抜粋した MOIS の理念になります。

「大宮国際中等教育学校では、様々な学びの中で課題に向き合い、失敗を恐れず立ち向かい、未知や想定外に出会っても驚かず、自ら新しい価値を創って楽しむ場面を設定しています。また、学校の学びが社会に近づけるよう、外部の人や社会と多くつながり、将来、実社会で役立つ経験を積み重ねた教育活動を展開しています。そして、それらの学びを通して Grit(やり抜く力)、Growth(成長し続ける力)、Global(世界に視野を広げる力)の3つのGを6年間通してバランスよく身に付けることができます。また、「生涯にわたって自ら学び続ける力」や「自分の頭で考え抜き、新しい価値を生み出す力」など、国際的な視野に立って多様性を理解して探究し続ける「真の学力」を6年間の連続性の中で育んでいきます。」

MOIS の目指す姿はこの文に表れていますが、特に着目すべきポイントを絞ってご紹介します。

#### (1) 主体的な学びあい

MOIS 生であれば何度も聞いた、「主体性」です。これだけでは、自ら進んで行動する姿という意味ですが、MOIS ではこの主体性に加えて「協働」というものも重要視しています。つまり、他者と能動的に関わり合い、問題を見つけて出して解決する力を重要視しているのです。

#### (2) 新しい価値を生み出す

MOIS の強みとして3Gプロジェクトがありますが、この授業の本質は、生徒自らが自分にとって価値のあるモノを見つけることにあります。ここでいう

「モノ」は、例えば料理やスポーツの研究、校外でのボランティアなどが挙げられますが、よりマクロな視点では、「他者貢献が好き」「この分野に関わっていきたい」など自身の好みの傾向にも適用されます。いずれにせよ、自身にとって価値のあるモノを生み出すという部分に MOIS は長けています。

#### (3) 多様性の理解

三つめは国際的な教養を身に着けるうえで欠かせない「多様性の理解」です。MOIS ではさんざん言われ続けてきた多様性ですが、今一度この多様性について振り返りましょう。

社会一般に言われている多様性とは、いわゆるジェンダーや年齢、国などが挙げられます。実際、多くの場合そのような人自体を指すものとして使われることが多いですが、MOIS の場合は若干使われ方が違うように思われます。

確かに、人自体の多様性もありますが、MOIS の場合は選択肢の多様性もあるのではないのでしょうか。MOIS の大きな特徴として、生徒企画のワークショップや ASA 活動がありますが、それらは選択肢の多様性をよく表しているといえるでしょう。生徒が自分の興味ややりたいことに従い、いい意味でばらばらに活動している部分は、MOIS の多様性を評価する一つの指標でしょう。また、MOIS はこの点において、お互いがやっている活動を否定しないところが素晴らしいと思います。そのような雰囲気が先か、みんながばらばらにやり始めたことが先かはわかりませんが、どちらにせよ多様性を無意識に受け入れている、当たり前としている部分が MOIS の良いところでしょう。

このように、MOIS は様々な面で魅力的ですが、実はこれらの長所は模擬国連の目的とも近いということを事項でご紹介いたします。

## 2. MUN の目指す姿、MOIS の目指す姿

それでは、MUN についてご説明いたします。まず前提として、MUN の目的は国際問題の理解の深化と国連の仕組みの理解にあります。しかし、国連の仕組みの理解という点は、もともと模擬国連が企画されたのが第一次世界大戦後の国際連盟設立時だったため、社会的関心も高く当然のことといえるでしょう。そのため、現時点では「国際問題の理解の深化」が、模擬国連の主たる目的となっているでしょう。

そして、この点において、各大使同士で行われる「非着席討議 (Unmoderated Caucus)」は、模擬国連の中でも非常に重要な部分となります。なぜなら、非着席討議を通してお互いのトピック (国際問題) に対する見方を理解することは、同時に国際問題の理解を深めることに寄与するからです。そのため、模擬国連は、他者との共同を通じて国際問題への関心を深める姿を一つの理想としている部分があるのです。

そして、この部分と前述した MOIS の理念の間には、複数の類似点があります。まず、他者との協働には、自身は勿論、相手の主体性が不可欠です。お互いの国益を理解し、譲歩しながら国際問題に対処することは模擬国連の重要な過程であり、主体性を持った生徒はこの過程においてその力を十分に発揮できるでしょう。

次に、「新しい価値の創造」ですが、こちらはDRに顕著に現れます。模擬国連は、模擬だからこそ、自由な発想でお互いの国の国益を達成する術を考えることができるという利点があります。そのため、MOISで培った自分にとっての価値を見出すことを応用し、相手にとって価値があるDRを作成することも模擬国連において重要な部分となります。

最後は多様性の理解です。いうまでもありませんが、模擬国連に参加するすべての大使は異なった国を割り振られています。トピック（国際問題）を捉えるために、彼らと能動的に対話を重ね、理解を深めていくことは「多様性の理解」に寄与するでしょう。また、MOIS独自の「選択肢の多様性」という面でいえば、模擬国連は自国の立場をDRなどによって変えることもできますし、国際問題解決のための様々な方法を構想し、議論することも選択肢の多様性を強い結びつきが感じられます。

以上が、MOISとMUNの親和性が非常に高い所以であり、同時にMOISでMUNが必要である理由です。皆さんも少しは興味がわきましたでしょうか。

### 3. 「国際社会の英語」—Not 外国語学校, But 国際学校—

別の項でもお話いたしました。国際言語における英語の位置づけは、我々が考えているほど難しいものではありません。つまり、相手に伝われば国際言語としての英語の機能は果たしているのです。よく、外国語学校と国際学校は混合されがちですが、そのような面でいえば、MOISは国際学校に寄りの学校であるといえるでしょう。なぜなら、流ちょうな英語を求められるわけではないし、卒業要件に英語の試験などがないからです。かといって、英語で話す機会は多く、例えば英語ネイティブの先生と話す機会はほぼ毎日あります。しかし、彼らと話すときは流ちょうな英語ではなく、自分たちが伝えたい内容を手持ちの単語と文法を駆使して話します。外国語学校であれば、その際、欧米を手本としてより美しい英語を目指しますが、我々MOIS生はそれよりも自分が考えていることを伝える一つの手段としてとらえている人が多い印象を受けます。また、MUNに必要な国際問題の理解では、様々な国の大使と話す必要がありますが、そこでは流ちょうな英語というより自分の国益や政策、相手への質問などが「伝わる」英語であるかのほうがはるかに重要です。国際学校としての位置づけであるMOISと非常に似ていませんか？

## 第四章 英語を用いた高等教育の学び

### 1. 現在の英語教育の課題

著者は2024年時点で高校3年生ですが、友達の話や自身の実体験に基づく日本の英語教育のあり様には問題が溢れています。正確には、問題が解決されるまでの過程が著しく遅いということが一番の問題であり、すべての問題の根源にあります。

その中でも、二点、私からご紹介したいと思います。

まず一点目は、目的と手段が混合しているという点です。皆さんも、学校で学ぶ英語は本当に英語話者との会話で使うことができるのか、そう思ったことはありませんか？この疑問が出てくる背景には、少なからずこの「目的と手段の混合」に原因があります。そしてここでいう目的とは、英語を学ばなければならないコンテンツであり、手段とはそのコンテンツを達成するための「道具としての英語」を指します。具体的に例をあげましょう。

ある男性が、海外の大学に留学しました。そして、そこで素敵な女性と出会い、男性は連絡を取りたいと思うようになりました。しかし、彼女は日本語がわかりません。そこで男性は、彼女と連絡を取るために必死で英語を勉強し、連絡を取り合うことができるようになりました。めでたしめでたし。お分かりになりましたでしょうか？もう一つ例をあげましょう。

政治経済の勉強が好きな高校生がいました。彼は政治経済のテストにおいて、高校でもトップの成績を取っています。そして、その高校生はイギリスの政治体制について興味を持ち、現地で学びたいと考えるようになりました。しかし、彼は政治経済の勉強において秀でていたのですが、英語は今まであまり勉強してきませんでした。そこで、彼はイギリスで政治を学ぶために英語を勉強し、半年後、留学に行けるレベルにまで語学力が伸びました。これもめでたしめでたし。

お分かりになりましたでしょうか。一つ目の例では、「好きな女性と連絡を取る」ということが英語を学ぶための目的になります。そして、彼にとって英語は、その目的を達成するための手段・道具としての位置づけになっています。同様に、二つ目の例では、海外で政治を勉強するというコンテンツを得るため、彼は英語を勉強しました。この例から私が述べたいのは、英語というのはあくまで自分の意見を主張したり、コンテンツを得たり、目的を達成したりするための国際共通語という一つのツールに過ぎないということです。これは、考えれば当たり前のことかもしれませんが、例えば、このブログを読んでいる方の多くは日本生まれだと思います。しかし、皆さんは日本語をなぜ使うのでしょうか。一般には、日本にいる状況で、相手に自分の意

思を伝達したり、逆に相手から情報を得たりする上で最も需要があり、身近で使いやすいツールだからだと思います。純日本人同士の会話において、あえて日本語以外の言語を用いることはほとんどないでしょう。

英語の場合も同じです。相手と意思疎通を図るうえで最も需要があり、身近で使いやすいのであれば英語を「道具」として用いればよいのです。そして英語は、世界の共通語として位置づけられているため、他国の人と意思疎通を取るうえで最も需要があり、世界の共通語という面では最も身近な言語なのです。

しかし、日本の場合は英語を道具としてではなく、目的として使う傾向が強いように思えます。これは日本史を振り返れば明白で、日本は昔から他国と海で隔てられていました。そして、世界で貿易が盛んにおこなわれている時期、日本では江戸という元号でしたが、ここでは鎖国という政策がとられています。つまり、歴史的に日本は国外との接点がなかった、もしくは意図的に接点を設けなかった過去があり、この状況下で他国と外交する上で必要な「道具」としての英語はほとんど普及してこなかったようです。一部の外交官や優秀な留学生には必要なツールでしたが、ほとんどの日本人にはこの道具を持つ必要がなかったのです。

明治維新から始まり、第二次世界大戦後、日本は欧化政策に努めてきましたが、日本文化保護の観点から英語が公用語となることはありませんでした。しかし、国際化が進む中、英語を学ぶ必要性を意識し、大学入試の主要受験科目として英語が制定されたのですが、この時期に日本は手段と目的を混合するミスをしてしまったように思えます。大学に合格するための手段として英語を用いることが問題なのか、それは勿論問題点の一つですが、手段・道具としての英語という位置づけは変わっていませんし、海外大学で学ぶために英語を学ぶために英語を学ぶことと大きな差異はないため、一番の問題点ではありません。一番問題なのは、前述のとおり、英語を学ぶことを目的としてしまう危険を孕んでしまったということです。偏差値の高い大学に入るためには、通常高い英語運用能力を身につけなければなりません、決して目的を「高い英語力を身に着ける」としてはいけません。「高い英語力を身に着ける」のはあくまで目標であり、目的は自分が目指す大学に入ることだからです。これは英語を学ぶ上での大前提ではありますが、それに加えて、日本では「手段としての英語」のニュアンスも少し異なります。前述のとおり、英語は国際社会において相手と意思疎通をするための道具・手段ですが、今日の日本では、相手との意思疎通を目的とする場合より、主要受験科目としてコンテンツ化され、大学受験に合格するための手段としての面がより顕著なようです。要するに、日本は周りが海で囲まれているため、今も昔も英語を実際に意思疎通のツールとして使う機会が少なく、国際化に伴って英語を学ぶ必要性が叫ばれつつも実際は英語を使う必要がないというのが現状なのです。実際に使う機会がなければ、冒頭でも紹介した、「本当に学校で学んだ英語は通用するのか」という疑問が出てくるのは当然のことです。

そのため、現在の日本における英語教育は、国際社会で相手と意思疎通をする手段・道具であるということを示す必要があります。日本は、住民のほとんどが日本人で構成される単一民族国家のため、意思疎通の手段として英語を使う機会が少ないのは当然ですが、それは教育機関や学校が改善すべき点です。

そして私が思うに、模擬国連という教育プログラムは、その改善策として有効なのではないでしょうか。模擬国連は、ある国際問題について、各国が納得のいく改善策をまとめるというコンテンツ・目的があらかじめ提示されており、英語はそれぞれの大使たちと意思疎通を行う手段として使われます。そのため、模擬国連を学校の教育プログラムとして取り入れることは、試験に合格する手段として使われてきた、これまでの英語の概念を再構成する有効な手立てとなり得るでしょう。

## 2. 「伝わる」英語

日本の英語教育のもう一つの課題として、国際語として英語を捉えられていない現状が挙げられます。明治維新の欧化政策から、日本が手本としてきた理想の社会構造は欧米、とくにイギリスでしょう。当時産業革命を経て世界のトップに躍り出ていたイギリスは日本だけでなく周辺のヨーロッパ諸国をはじめとする世界の手本となりました。17世紀のオランダにも同じような傾向がみられますが、要するに日本は明治維新の影響を要所要所で未だに引きずっており、それは英語教育においても例外ではないということです。皆さんが英語のスピーキングを上達させたいと思った時、どのように話すことを理想としますか？多くの場合、アメリカやイギリスのような英語なのではないでしょうか。これは、明治維新に始まったイギリスを欧化政策の手本とする考え方と、第二次世界大戦以降のアメリカを手本とする米化政策をよく表していると言えます。確かに、EnglandのEnglishですから、イギリスを手本としていたのはわかりますが、国際社会における英語は勿論イギリスやアメリカのネイティブが話すようなイントネーション、アクセントの英語だけとは限りません。むしろ、これらは少数派ともいえるのではないのでしょうか。実際、世界で英語を話す人はおよそ10億人いるといわれていますが、その中でアメリカやイギリスのように英語を第一言語としている人は4億人に満たないといわれています。残りの6億人強は英語ネイティブではないのですから、当然いろいろな訛りやアクセントがあります。日本人のカタカナ英語も一つの訛りといえるでしょう。しかし、いずれにせよ「英語」であることには変わりありません。重要なのは、「相手と意思疎通が可能な英語」ということです。独特の訛りやアクセントがあっても、相手に伝われば国際言語としての英語には何の問題もないのです。

現在、日本の英語教育では第一言語を英語としているアメリカの英語を手本としていますが、それ自体には問題ないのですが、この英語だけが正当なものであるという認

識は誤っているので注意が必要です。重要なのは、英語が国際社会において相手と意思疎通を図るためのツールに過ぎないということと、意思疎通ができるならどのような訛り・アクセントがあったとしてもそれは国際言語としての英語として政党なものとしてとらえられるべきなのです。なので、日本のカタカナ英語でも伝わるのならそれは国際言語としての英語なのです。重要なのは、アメリカ人のような流ちょうな英語を話すことではなく、自分が伝えたいことを相手が理解できる言語で伝えることができるということです。あるニュースで、英語を第二言語としている東南アジアの方に自分の英語の訛りやアクセントについてどう思うか聞いたものがありましたが、彼らはそれを一つのアイデンティティだと認識していました。簡単に言えば、日本語の中の秋田弁、関西弁のように、英語の中にも東南アジア弁、東ヨーロッパ弁はあるという認識です。日本における英語もこのような認識であることが望ましいですが、いまだ歴史の名残をたどっているというのが現状のようです。

模擬国連においてもこのことは変わりません。必要なのは、他国の大使に自分の国のことを英語で伝えられることであり、流ちょうな英語を話すことではありません。もし、あなたの国の大使が、「他の国に自国の政策や国益を知ってもらいたい」という目的ではなく、「きれいな英語を話したい」と思っていたらどうでしょうか。代表を任せ気には到底なれません。模擬国連だとしてもそれは同じで、相手に自分の意見が伝わればいいのです。模擬国連の参加者だけでなく、日本で英語を学ぶすべての人はこのことを念頭に置く必要があるのです。

## 第五章 参加者同士の好影響

### 1. アクティブ・ラーニング

アクティブ・ラーニングは、その名の通り、生徒が主体となる学習形態の総称で、現在の教育において重要視されている一つの要素になります。今までのインプット重視の教育からアウトプット重視の教育に転換すると同時に、レポートやプレゼンなど、自己表現をすることの重要性がこのアクティブ・ラーニングでも示されています。MOISにおいても、生徒主体の学びを重要視していますが、具体的に模擬国連とどのような関係があるのでしょうか。

前提として、模擬国連という教育プログラムはアクティブ・ラーニングの一手法という位置づけでしょう。生徒が自ら国際問題を解決するために、他者との対話を重ね、最終的に一つのDRを作成する姿はまさにアクティブ・ラーニングを表しています。勿論、アクティブ・ラーニングは、個人の学びにおいても有効な手法ではありますが、私は特に生徒同士の学びにおいてその真価が発揮されると考えています。つまり、アクティブ・ラーニングは学習者が相互に関わるという面で「アクティブ」なのです。模擬国連でも、他者に傾聴の姿勢を向けたり、協調しながらDRを作成したりしますが、これはまさしく学習者が相互に関わり合うアクティブ・ラーニングです。また、MOISにおいては自身のレポートやプレゼンに対して他の生徒が客観的な評価をする機会があると思います。あれも、生徒の主張に対して意見を重ねていく一つのアクティブ・ラーニングの姿です。

このように、MOISとMUN、そしてアクティブ・ラーニングは相互に相性の良いものであるように思えます。それでは、次にMUNに焦点を絞ってアクティブ・ラーニングの効果をより深掘したいと思います。

### 2. 「ただ乗り」を許さない学び

模擬国連において、アクティブ・ラーニングの話は上げましたが、ここでもう一つ良い影響があります。それは、「ただ乗り」の防止です。2020年あたりからコロナが蔓延し、オンラインツールを活用した授業が急増しましたが、それと同時に、オンライン授業のただ乗りも発生しました。ただ乗りとは、授業に参加はするが、グループワークなどでは働かず、いわゆる単位だけを取る行為を指しますが、これはオンライン環境だけには限りません。いわゆる対面型の授業の場合でも、自分の意見を場に出さずにぼーっと先生の話を聞いている人がいることは事実で、そのような人はただ乗りをしている生徒と大きくは変わりません。

しかし、このような態度を許さないのが模擬国連です。模擬国連は、そもそも2人のペアで臨みます。ですので、仮に自身が活動しなければ、もう一人の負担が大きく増

えてしまいます。複数人の授業で自分だけただ乗りするのは、自身にしか損は降りかからないので、ただ乗りをする人の心理的負担は軽くなる傾向があります。しかし、模擬国連の場合、自身が休むせいでもう一人に大きな負担がかかってしまうため、ただ乗りしづらい環境ができるわけです。また、模擬国連では、他の国の大使から自国について質問される場合があります。その際、自国のことを紹介できなければ、同様にペアの人に迷惑がかかりますし、DRを作るためにも情報共有は大切なので、最悪全体に迷惑がかかりかねません。この、自分事ではなく、他者と協力して活動しなければならないという心理状態が、模擬国連がただ乗りをしづらくしている所以です。

### 3. ロールプレイ型ワークショップの効果

次に、ロールプレイ型ワークショップにおける参加者同士の効果についてご紹介いたします。そもそも、ロールプレイ型ワークショップとは何のことでしょうか。これは、生徒自らが役になり切って演じることで、実際の状況を理解しようというプログラムです。模擬国連、参加者が各国の大使という役になり切り、国の事前情報を得て実際にトピックを解決するというロールプレイをしているため、一例だと言えます。ロールプレイ型ワークショップの効果としては、自分自身が当事者意識を持つことができるという点にあります。通常の座学の授業では、教科書に書かれたものを読んで「海外ではこんなことが起こっているんだ」「この職業についている人はこんなことをしているんだ」など、「知識」として学びを得ます。しかし、ロールプレイ型ワークショップは、自身が当事者になり切ることで、「経験」として学びを得ることが特徴です。また、あえて自分になじみのない国の人、職業の役になることで、新しい価値観やバックグラウンドを体験することができるという点でとても効果的です。しかし、この効果を最大限発揮するには、役の背景となる情報をち密に調べ上げることが必要となります。模擬国連においても、準備段階では自国のトピックに関連する情報を入念に調べる必要があります。

## 第六章

### これからの MOIS、これからの MUN

#### 1. 今後の目標

まずは MOIS の方について。今年で開校 6 周年を迎え、完全な中等教育学校としてめでたく完成した大宮国際ですが、第三章で述べた、MOIS の主体性や国際的な視野はもっと成長できるはずです。1 年目から多くの分野に挑戦してきた 1 期生が現在の MOIS 像を形成してきたことは間違いありませんが、やはり 2 期生以降が私たちを超える勢いでいろいろなことに挑戦しているところに鼓舞されてきた部分もかなり大きいです。主体的な活動を通して、お互いにいい影響を与え合うことができる環境づくりが、これからも続いていくとよいなと思います。そして、その環境づくりをフォローする形で、模擬国連という教育プログラムがより多くの生徒にとって身近な存在にしたいと感じています。また、模擬国連の教育プログラムをより身近なものにするためにも、MOIS MUN Circle は、まず校内模擬国連に注力し、最低でも MOIS MUN Circle のメンバーが年に複数回校内で模擬国連を体験できるようにしたいと考えています。さらに、学校の LA や EI の授業と、このサークルの活動がコラボし、模擬国連を授業で全員が一度は出来るようにしたいと考えています。やはり、模擬国連というものに英語能力等の問題で抵抗意識があるのは事実です。なので、一度模擬国連に参加してみて、そのハードルを自ら壊す体験ができるような機会を設けたいと思っています。実際、LA の授業では 4 年生の時に MUN に関連したユニットを行っているのので、そこと協力していければよいなと思っています。

#### 2. 目標達成までの課題

現在は、6 年の綾部、木ノ内、鈴木主導でサークルの運営を行っていますが、この目標を達成するためには、私たちの代だけでは不可能なことも多くあります。まずは、MOIS の模擬国連に参加して下さるメンバーの方や、運営側の知識がある生徒を誘致していかなければなりません。そうして、模擬国連の活力を高めていき、校外内で活発に活動する雰囲気づくりやシステムを改善しようと現在活動しているところで

す。また、授業との連携については、サークルの活動や人数がある程度安定してからの話になると思うので、まだまだ先になるでしょう。それに伴って、現在私たちは、今後後輩にサークルを受け継いでいくために必要なことを考えています。具体的には、メンバーにこのブログで書いた内容を引き継いで、活動の方向性を定めたり、私たちが現在行っている広報や MOIS MUN の企画など、模擬国連の運営面の活動をブログな

どを通して記録したりしていこうと考えています。また、サークルとしてはやはり毎時新しい挑戦をしていかなければならないと感じているため、MOISの授業との連携や校外のサークルとMOIS MUN Circleの合同企画など、現在私たちが考えている展望を伝えていきたいと思っています。

総じて、まずは今年度のサークルの活動を通して、メンバーにできるだけ模擬国連とMOISの精神を再確認しなければいけないでしょう。頑張ります。

## 第七章

### まとめ

#### 1. MOIS MUN Circle に参加しませんか？

最後の章になります。まずは皆さん、ここまでお読みくださり、本当にありがとうございます。そして、皆さんに一つ言いたいことがあります。それは、

「MOIS MUN Circle に参加しませんか？」

です。本ブログをお読みくださった方であれば、模擬国連という教育プログラムが魅力的なものに見えてきたのではないのでしょうか。そして、読者の方の中に興味を持ってくださった方がいらっしゃったら、是非一度私たちのサークルに参加してほしいなと思います。私たちのサークルでは、MOIS 内で開催する模擬国連や校外の模擬国連に向けた練習を日々行っていますので、参加したことがない方も、練習の時間を確保したいという方も是非一度ご検討ください！

#### 2. 代表の意気込み

ここまで長々と模擬国連について述べてきましたが、卒業前の最後の年に、MOIS に何か残したいという思いがありました。そこで、MUN のサークルを立ち上げようと決心し、今まで奮闘してきました。そして、今は可能ならこのサークルがずっと今後も続いてほしいと思っています。このブログでもお伝えした通り、MUN は MOIS の理念と非常に親和性が高い。圧倒的に相性の良い教育プログラムであるのは明白なのです。

MUN Circle の代表として、私は模擬国連という教育プログラムを、MOIS の生徒が気軽に体験することのできる身近なプログラムというイメージにリメイクしていきたいと考えています。現状の模擬国連の一番の問題は、最初に参加するまでのハードルです。「英語が流ちょうな人がたくさんいるだろうから私は無理かも」「模擬国連って固いイメージがあるし難しそうだから参加しない」そういった意見が多く寄せられます。しかし、模擬国連の本質は、英語を上達させることではありません。模擬国連は国際的な視点を身に着け、他者と共同し、能動的に考える能力を発揮する優れた教育プログラムなのです。

私はそれを発信し続け、MOIS MUN Circle を引っ張っていきたいと思います。ご拝読ありがとうございました。